

シンポジウム 3

アトピー性皮膚炎の疫学と悪化因子

占部 和敬

国立病院機構九州医療センター皮膚科・アレルギー科



アトピー性皮膚炎が、我が国では 20 年前に比べ増加していること、成人型アトピー性皮膚炎が増加していること、欧米でも増加傾向にあること、世界的にも我が国は有症率が高いことを示した報告を紹介する。また平成 12-14 年度の厚生労働省のアトピー性皮膚炎の患者数の実態及び発症・悪化に及ぼす環境因子の調査に関する研究（班長：山本昇壯広島大学医学部皮膚科名誉教授）の分担研究者として、福岡市の 14 小学校の協力を得て小学 1 年生と 6 年生のアトピー性皮膚炎の検診を行ない、同時に発症、悪化に関与するアンケート調査を行なったので報告する。福岡市の小学校 14 校の 1 年生と 6 年生の計 1911 名の検診を行ったところ、アトピー性皮膚炎の有症率は 1 年生 15.9%、6 年生 15.1%と高値を示した。重症度から見ると、多くは軽症であったが 6 年生では中等症、重症あわせると 16%を占めた。全国調査では、全国 8 地区の平均は 12%で、福岡市は有症率が高く、地域差がみられた。検診時に行なったアンケート調査では、住居の種類、築年数、床の状態、浄水器の使用、入浴法、クラブ活動などの影響はみられなかった。悪化因子として、食物、汗、日光、ストレス、ホコリの関与が認められた。

悪化因子としては、ホコリに含まれ、そのアレルギーの主な原因と考えられているダニに注目し、その量を減らすことでアトピー性皮膚炎の症状が軽快するかどうかを検討した。検討は防ダニ布団カバーを用いて行なった。6 医療施設において防ダニ布団カバーおよび、外見上本物と識別できない通常の布団カバーを使用して頂き二重盲検群間比較試験を実施した（観察期間：6 ヶ月）。試験が適切に実施された 38 例を解析対象とした。その結果、使用 6 ヶ月後のダニ数は防ダニ布団カバーで 8.74 ± 7.28 匹、通常布団カバーで 30.3 ± 46.4 匹で、防ダニ布団カバーにおいて著明に減少した。しかし、TARC 値、皮膚症状、痒み、睡眠障害の程度においては両群間に有意の差は見られなかった。これらより、ダニ防止布団カバーを用いることでダニアレルゲンへの感作を予防できる可能性はあるが（報告あり）、いったん感作を受けた患者ではこれぐらいの環境整備では症状改善の効果はないと推定した。

また、九州大学病院総合診療部と行なった沖縄県石垣市乳幼児 565 名の検診結果では、幼児ではアトピー性皮膚炎の自然寛解率が高いことが明らかになった。その他、アトピー性皮膚炎に対する汗の影響、水道水の影響についても検討したので報告する。